

## “生産者向け研修会を終えて”

平成27年度軽種馬経営高度化指導研修(軽種馬経営技術指導者養成・技術普及)事業の生産地における肢蹄および健康管理技術研修として、門別と静内において生産者等を対象とした研修会を実施しましたので、その概要を紹介します。

日時・場所：平成28年2月16日(火) 午後6時～8時  
門別総合町民センター  
平成28年2月17日(水) 午後6時～8時  
新ひだか町公民館・コミュニティセンター

参加者：2月16日 101名・2月17日 108名

### 【講演内容】

#### 1. 「アシのトラブルを学ぼうⅠ」 JBBA田中弘祐

平成27年12月に冊子「生まれ来る子馬たちのために“アシのトラブルを学ぼう!”」が発行されたことから、当初から予定していた本冊子を基にした講習会である。

最初に「肢勢の見方」では、肢勢を判断するに当たっての注意事項として、まずは各種の歩様について説明した。駐立時は楽な立ち方や自由な立ち方を取ることが多いので、肢勢の判断に当たっては歩様を重視して、踏着時から負重極期までの肢のさばき方を良く観察する必要がある。次いで、前望と側望の肢勢の見方やその特徴を説明した。冊子に掲載されている肢勢の種類や異常などの細かな説明は、時間が限られているため割愛した。

「当歳馬の肢蹄異常の実態調査(発症状況)」では、調査に当たっての背景と目的、材料と方法を説明した。次に肢蹄判断基準マニュアル、解析項目について示した。結果として、20%を超える発症率を示した肢軸異常を先天性8項目、後天性2項目に分類し、発症状況を頭数別と肢別(Grade別)に示し、その中から統計的に有意差のあった項目や冊子には掲載していない興味深い項目について説明した。

#### おわりに

本冊子を発行したことで、牧場関係者・獣医師・装蹄師が同じ目線で、観察かつ判断するために必要な肢蹄異常の発症傾向を特定し、肢蹄異常の早期発見や予防に貢献する基礎資料になることから、日常の牧場業務に活かしていただくことを期待したい。

今回、持ち時間は1時間ということで、45分で講演を終え15分の質疑応答時間を計算していたが、どちらの会場でも質疑が無く残念であった。100名の前での

冊子  
「アシのトラブルを学ぼう!」



質疑には少々勇気がいるところであり、終了後には個々への質疑が行われた。

#### 2. 「生産地における若馬の骨疾患」

JBBA(当時)仙波裕之氏

以下の3項目についてデータを示しながら説明した。

##### (1) 若馬の骨疾患(DODについて)

平成18～20年のNOSAI日高の「電算カルテシステム」から、若馬の運動器疾患の症例、約5,500件のうち、DODに類する疾病1,338件のデータを抽出し、それらを集計・分析した結果から得られた、DODに関する情報を示した。

##### (2) 子馬の発育(成長とDOD)

飼養管理ソフトSUKOYAKAに内蔵されている「標準成長曲線」を説明し、「標準」を求めるのに使用した約2,400頭の馬のなかから、DODを発症したことが分かっている子馬15頭の成長曲線を示した。DODの発症と成長との関係は、このような成長を追った記録が充実すると、詳細が分かってくるだろう。

##### (3) 市場レポジトリー(獣医療検査の情報公開)

臨床獣医師は、DODを腫脹や跛行などの症状で、診療対象として診ることから経験を積んでいく。一方、市場レポジトリーに集まるレントゲン画像からも、症状のないDOD(特に離断性骨軟骨症など)が多く有る事を知った。症状から分かるDODの率と、レポジトリーで見つかる率の差から、かなりの率で何もわからないまま競馬をしている馬も多いことが予想される。症状と骨病変の関係が、よく分かっていないことを痛感した。このことを、上場者にも購買者にも、分かってもらうことから、レポジトリーとは何か、レポジトリーをどのように利用すればいいのか、将来、どのように向けたら良いのかを考える。

#### おわりに

馬の飼養技術に関する情報は、海外からの情報や、研究者からの情報など多々あるが、はたして自分の牧場ではどうしたら良いであろうか。というのが牧場関係者の最大の興味ではないだろうか。本講演は、日高の牧場の実態はこうですよ、ということを知ってもらうには、良い内容の情報のつもりで実施した。

また、質疑応答が全くなかったのは、非常に残念であったが、講演会終了後に聴講者が寄ってきて、かなり個々の問題に関する質問をされた。そのような意味では、「小集団勉強会」や「巡回指導」の方が、効果的と思われる。



JBBA(当時) 仙波裕之氏の講習風景